

IPM実践指標(野菜(露地))

管理項目	管理ポイント
適正な作型・品種の選定	病害虫の発生しにくい作型を選定する。
	病害虫抵抗性品種・台木を導入する。
健全種苗の使用	種子消毒され、病害虫に汚染されていない健全な種子を使用する。
	病気が発生した苗は早く処分し、健全な苗を育苗、定植する。
定植前圃場の病害虫密度抑制	対抗植物の利用や、輪作等を実施する。
圃場及びその周辺の衛生管理	病害虫の発生源をなくすための除草を実施する。圃場の排水対策を講じる。
	罹病植物及び罹病部位を除去し、適切に処分する。
	栽培終了後の残さを適正に処理する(圃場外への持ち出し、野良生えの除去など)。
	適正な定植密度を保ち、過繁茂にならないようにする。
適正な肥培管理	通路及び畝のマルチ被覆、中耕、施肥などの肥培管理を適切に行う。
防除の要否・時期の判断	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手、確認し、適期防除を行う。(発生予察情報対象作物)
	圃場を見回り、病害虫の発生状況を把握する。
害虫の侵入防止対策	黄色蛍光灯、防虫ネット被覆、光反射シート、べたかけなどの侵入防止対策を1つ以上実施する。
農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上での使用量・散布方法を決定する。
	農薬を散布する場合には適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。
	農薬を使用する場合には作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤耐性・抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。
	生物農薬等の天敵にやさしい農薬を利用する。
作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬の散布履歴、IPMに係わる栽培管理状況を作業日誌として記録する。

IPM実践指標(野菜(施設))

管理項目	管理ポイント
適正な作型・品種の選定	病害虫の発生しにくい作型を選定する。
	病害虫抵抗性品種・台木を導入する。
健全種苗の使用	種子消毒され、病害虫に汚染されていない健全な種子を使用する。
	病気が発生した苗は早く処分し、健全な苗を育苗、定植する。雨よけ、高設育苗を導入する(いちご)。
定植前圃場の病害虫密度抑制	対抗植物の利用や還元土壌消毒や熱利用消毒等の土壌消毒を実施する。
圃場及びその周辺の衛生管理	病害虫の発生源をなくすための除草を実施する。圃場の排水対策を講じる。
	罹病植物及び罹病部位を除去し、適切に処分する。
	栽培終了後の残さを適正に処理(施設の蒸しこみ、圃場外への持ち出しなど)する。
	施設内の換気や摘葉をよくし、敷きわら、籾殻等の施用により施設内の湿度を適正に保つ。
適正な肥培管理	通路及び畝のマルチ被覆、中耕、施肥の適正管理、着果負担の軽減などの肥培管理を適切に行う。
防除の要否・時期の判断	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手、確認し、適期防除を行う。(発生予察情報対象作物)
	圃場の見回り、粘着板の設置により病害虫の発生状況を把握する。
害虫の侵入防止対策	黄色蛍光灯、防虫ネット被覆、紫外線カットフィルム、光反射シートなどの侵入防止対策を1つ以上実施する。
農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上での使用量・散布方法を決定する。
	農薬を散布する場合には適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。
	農薬を使用する場合には作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤耐性・抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。
	生物農薬等の天敵にやさしい農薬を利用する。
作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬の散布履歴、IPMに係わる栽培管理状況を作業日誌として記録する。